

スター教授 いでよ

創立から100年余り、九州大学が転機を迎えている。九州では確固たる地位を築いてきたが、国内外のトップクラスの大学と比較すれば、ブランド力やグローバル人材育成で後じんを拝している。少子化時代に受験者数は伸び悩み、稼ぐ力にも強さがない。世界をリードする水素研究やキャンパスの大移転を機に飛躍できるのか。次の1世紀を見据えた「九州の雄」の挑戦が始まった。

挑む 九大

次の1世紀へ

いま九大では学生、教職員合わせて延べ約1万8700人の大がかりな引っ越しが進む。移転先は伊都キャンパス（福岡市西区、福岡県糸島市）。275畝の広大な新天地だ。六本松（福岡市中央区）や箱崎（東区）に分散していた施設を2018年度中に統合する。

設備生かすのは

「水素関連では世界最強の施設だ」。次世代燃料電池産学連携研究セン

世界の大学ランキングでは100位圏外

1位	米マサチューセッツ工科大
2	英ケンブリッジ大
2	英インペリアル・カレッジ・ロンドン
4	米ハーバード大
...	...
31	東大
36	京大
71	東北大
...	...
103	名古屋大 (注)英クアアレリ・シモンズ調べ、2014年、大学は一部のみ抽出
126	九大
135	北海道大
197	慶応大

先端研究の舞台整う

移転先の伊都キャンパスでは施設の拡充が急ピッチで進む (2月)

ブランド力は周辺大が追いつける



九州大学が郊外の伊都地区への施設集約を決めたのは1991年。総面積が旧7帝大の中で最も小で手狭になっていた。福岡空港に近いキャンパスでは騒音問題に加え、航空法による建物の高さ制限も抱えていた。移転を機に水素を軸と

移転、開始から10年

当の安浦寛人理事)。

九州大学が郊外の伊都地区への施設集約を決めたのは1991年。総面積が旧7帝大の中で最も小で手狭になっていた。福岡空港に近いキャンパスでは騒音問題に加え、航空法による建物の高さ制限も抱えていた。移転を機に水素を軸と

「水素関連では世界最強の施設だ」。次世代燃料電池産学連携研究セン

「水素社会」を伊都キャンパス内で実現させる。最先端有機光エレクトロニクス研究センターで

「水素社会」を伊都キャンパス内で実現させる。最先端有機光エレクトロニクス研究センターで